

1983年福岡県知事選挙関係資料

奥田， 八二

福留， 久大
九州大学教養部

<https://doi.org/10.15017/6781050>

出版情報：奥田八二日記研究会会報. 10, pp.380-389, 2023-03-31. 奥田八二日記研究会(九州大学大学
文書館内)

バージョン：

権利関係：

【資料】

管見・奥田知事を生んだもの
——もう一つの県民の会のことなど——

九州大学教養部 福留 久大

1. 県民の会前史

書いておきたいこと

文字通り、管見——くだのあなからのぞき見て知りえた範囲で、奥田八二福岡県新知事の誕生を促した要因の1, 2について、走り書きしてみたい。

書いておきたいことのひとつは、いまひとつの「県民の会」についてである。「清潔な県民本位の県政をつくる会」略称「県民の会」（福岡市博多区博多駅東2丁目6-26、具島兼三郎代表）は、奥田知事の選挙を担った組織として、周知であるが、いまひとつ、奥田八二先生に深く関わる「県民の会」として「県政の浄化と刷新を志す県民の会」が存在することは、ほとんど知られていない。

書いておきたいことのふたつめは、無党派市民層（とくに婦人層）の活動についてである。昨年11月12日、奥田先生は、有名な方の「県民の会」の出馬要請を受けられたのだが、その当時から「今どき社共主導の選挙じゃ勝てんよ。県民が立ち上がり、“この人”こそと推してもり立てる戦いだったら勝てる。」というのが、奥田先生の口ぐせだった。そして事実、福岡知事選挙の、そして北海道知事選挙の決定打となったのは、政党の枠をこえた無党派市民層の結集だった。福岡県について、県議選で、社会党は16議席で2減、共産党は2議席で1減と、極端な少数与党であることを勘案しただけで、社共両党をこえる無党派市民が奥田知事誕生のカギを握っていたことが、理解される。

偶然に九州大学教養部で・・・

私は、政党加入の経験もなく、全くの無党派市民としての動き以上には、特記すべき活動歴はない人間である。が、偶然に、九州大学教養部を職場としていたために、今回の福岡県知事選挙を巡っては、その前史と周辺とについて、貴重な経験をすることができた。

前史というのは、いまひとつの「県民の会」のことである。奥田先生が1950年以来九州大学教養部で社会思想史の講義を続けてこられたことは既に広く知られている。私の本務は教養部の経済学の教師であるので、奥田先生を最長老とする社会科学教室に属することになる。そして研究室も、廊下を隔てた斜め向かいで、物理的に近い距離にある。そん

な縁で、昨年 7 月、奥田先生が、当時の亀井知事の五選に反対して対立候補者を擁立すべきだという運動を始められたとき、その動きの幾齟かを垣間見る機会を得た。その一端を報告して、時務をわきまえた責任感の強い人物としての奥田先生の一面を紹介できればと考える。

周辺というのは、「社・共」を中軸と仮定して、その他大勢の無党派市民層を指したいのだが、ここでは、九州大学教職員組合（とくに教養部教職員組合）の動きに触れたいと考える。

教職員組合というと、「社・共・労」として「社・共」ともに中軸を成すのではないかと、と世間では誤解されそうである。が、1970 年以來私の知る限りでいえば、九州大学教養部の教職員組合は、「社・共」と並んで「労」の一角を占めうるような堅固な組織だとは思えない。一種の親睦団体として、教職員のソフトボール大会、海水浴や納涼船、クリスマスパーティなどのレクリエーション、そういう身近なことが活動の中心で、国政レベルであれ地方レベルであれ、選挙に特別の関心を寄せたことは全くといってよいほどなかったのではなかろうか。この辺の認識については、私自身ズボラな組合員でただツキアイ料として組合費の納入を続けてきただけなので、正確さを欠くのだが……。

その程度のズボラな私が、昨秋、その教養部教職員組合の書記長にさせられてしまった。執行委員の引き受け手がなく、前期執行委員長から友達甲斐に引き受けて下さいと泣き落されたのである。もっとも、その泣き落しの前提として、奥田先生に関わる次のような事情が存在した。つまり、かつて従来の教職員の親睦団体を組合に転換した時期に、その転換の推進役だった奥田先生が、社会科学教室から毎年ひとりは執行委員を出すことを不文律とした、というのである。後に、奥田先生に「先生が作られたルールのおかげで、ぼくは 3 回目の執行委員です、恨めしい限りです」と抗議したことがあった。奥田先生は、「社会の教室は 16 人いるやろう。君が九大に来て何年や、まだ 14 年なら、1 回やればいいんだよ、3 回もやる必要ないよ。他の人に廻せよ。」と切返した。だが、16 人順番に廻すことは事実上できない。大学内外の重大な役職に就任している人は除かなければならないし、奥田先生自身のように定年退官まであと 1 年の人に押しつけることもできない。ともあれ、そういう義理人情の結果として、私は西も東も知らない素人書記長に就任することとなった。就任の途端に国家公務員の給与に関する人事院勧告を政府・自民党が凍結するという事態にぶつかり、ついで、福岡県知事選挙に亀井現職知事の対立候補として奥田先生が引きだされるという大事が出現した。

草の根の県政浄化運動

周知のように一般に公職選挙の運動に関しては大変にきびしい制限が課されている。その制限は、国家公務員のばあいは、更にきびしい。そういう状況のなかで、県民の一人として県政の浄化を願うわれわれが合法的に出来ることは何か。全くのノンポリで何の蓄積

もなかった組合は、公職選挙法や人事院規則の勉強から始めて、憲法^の精神^に即^{して}われわれ^に出来ることを手探りし、その成果を組合員に普及することに努めた。4月10日、知事選挙投票日、4月11日、奥田八二先生当選——この嬉しい限りの結果が生まれるまで、われわれは、手作りの合法的な県政浄化運動を組合として推進しえた、と信じている。それは、福岡県下に無数に展開された無党派（ないし超党派）県民の草の根運動のひとつと言えよう。

先述のように教養部教職員組合の結成にあたって奥田先生の尽力は大きかったようであるし、九大全体の教職員組合の委員長を先生自身引き受けられたこともある。その意味では、この草の根の県民運動の土壌作りには奥田先生の力が与って大きい。そういう“草の根”の県民運動の一端を報告するのが、いまひとつの狙いである。

2. 清新な知事候補を早く！

奥田先生は、社会的責任観念の非常に強い人だと思う。

昨年7月の末、大学教師は普通、夏期休暇の3分の1が過ぎ去ったのに論文の進行ぶりは鈍い、とイライラしている時期のことである。奥田先生自身も、教養部社会科学研究室の紀要「社会科学論集」23号のために、結局は九大における先生の最後の仕事となった論考、「社会福祉政策の現段階と問題点」に取り組んでおられたはずである。

学問上の仕事をおろそかにすることなく、しかし同時に社会的諸問題の解決にも力を注ぐというのが、奥田流なのだと思うが、この時も、急いで亀井候補の対抗馬を推挙する運動を始められた。

私など、社会問題については、無力感のとりこになっていた。亀井氏が、同じ陣営から新規出馬の動きを見せた桑原氏をしりぞけて、五選出馬を7月24日に声明したときも、オモシロクナイとは思いつつも、何か具体的な行動をとることなど全く念頭になかった。1980年から1981年にかけての英国生活で外国の大学での研究生生活にすっかり魅せられ、何とか次はアメリカ合衆国の生活を体験したいと、奨学資金の応募書類を作るために、あやしげな英文を綴ることに熱中していた。

奥田先生のことだから、多方面にわたってさまざまな働きかけをなされたに違いないのだが、私の知る限りでは、後の有名でない方の「県民の会」につながる動きは、当日奥田先生の電話を受けた福岡市在住の数人の会合に始まったものと思える。夕食時だったので軽くピールを呑み、各自好みのどんぶりもので空腹を満しての話し合いだった。場所は、福岡市中央区薬院のはかた会館の小部屋。無論のことだが、部屋代・食事代・飲物代は、参加者の割勘、それは後に至って会合の規模が大きくなって変わらない原則だった。

亀井県政のおごりと腐敗は多数県民の怒りの的である、だが現知事亀井氏推挙の諸党派以外からは県民の怒りの受け皿となる対立候補擁立の動きはない、このままでは県民は投

票権の行使さえ出来ないことになりかねない、対抗馬の推挙の動きを惹き起すべきだと思うが、どういう方法があるか。奥田先生の趣旨説明は、そういうものだった。

この会合が、世話人会的役割を果たすことになって、8月1日、日曜日、「県政の浄化と刷新を志す県民の会」のはじめての会合が開催されることになる。場所は、博多観光ホテルの一室。この会合には三十数名の参加者があったが、その人々への電話連絡、その会合で配布すべき趣意書作成は、ほとんどすべて奥田先生自ら、あるいは奥田先生に極く親しい方の手作業に依っていた。

この会合で討議・採択され、県民一般向けに出されたアピールが「清新な知事候補を早く！福岡県民のみなさんに訴えます」というものである。その原案文は、上述の通りほとんど奥田先生の手づくりである。対立候補作りの中心にあった先生自身が対立候補として立たれることになり、ついで初志を貫いて県政浄化の責任者となられた今日、新知事が今回の知事選をいかに把えていたかを物語る資料として、紹介に値するものと考えられる。以下はその全文である。但し縦書を横書に改めた。

もう一人知事候補を早く！福岡県民の皆さんに訴えます。

中央・地方とも財政の赤字が深刻化し、一般に不況が長びき、行政改革が叫ばれているさなかに、「百年の計」と称して立派すぎる県庁舎ができ、つづいて桁はずれに豪華な知事公舎が建設され、知事の長期権力の座に安住するおごりと県民生活無視がここにきわまったとの印象を強めております。

折しも知事公舎建設をめぐる公私混同、公費不当支出、知事をとりまく県高級職員の腐敗となれ合いのもとでの職員一般の士気停滞等々の諸問題が一気に噴出し、県下一円はもとより全国的に福岡の次期知事選挙が注目されるに至りました。しかし、こうした諸問題を糾明し、県政浄化の義務を負う六月県議会は、自民党など与党の数の力と、知事とその側近高級職員の逃げに徹した議会運営により、逆に疑惑を深めつつ幕切れとなりました。たまりかねた一部県民が7月1日から「監査請求署名」に立ち上がり、疑惑解明の努力をつづけていることは周知のとおりであります。

このような状況をはさんで、来春の知事選挙に向け亀井現知事は、同じ陣営からの新規出馬の意思の強い桑原氏を強引に退け、公舎建設をめぐる疑惑に対する県議会内外の非難の嵐を巧みにくぐり抜け、7月24日、自民党、農政連、民社党、同盟などの推挙をバックに五選出馬を正式に表明しました。「初心にかえる」との美辞麗句を用いたものの、もし亀井五選が実現すれば、多選の弊として、とくに現知事の人格の底から沸き出る弊として、県政の腐敗、耐え難き権力の乱用が一そう強まるであろうことは目にみえています。亀井氏は五選限りを誓約したそうですが、私どもは彼の20年にわたる権力の座は決して許すことはできません。

しかし残念ながら、腐敗と権力の乱用に利益を見出す現知事推挙の諸党派以外からは、待てども待てども対立候補擁立の動きは今日に至るもきかれません。県民の多数が新しい候補の出現を切に待望していることは、例えば「監査請求署名」運動 1 ヶ月の実践の中からも、十分に察知しうるところです。県民の誰もが、この状況に手をこまねいているならば、県民の民主主義をテストせんとする天の声に対し耳をおおうこととなります。腐敗の蔓延と権力の横暴を抑止し、民主主義と温か味のある県政を蘇生・刷新する機会は今回をおいてないし、そのための県民の奮起をおいてないと断定されます。

私たち有志は、もう待てないという気持ちで今日ここに集りました。有志の声を集めて、世間に聞える形ある一つの声としたいのです。亀井五選を推挙しない、民主的な、県下のどの団体からでも、今直ちに一本化した対抗馬の推挙の動きを表面化してほしい、あるいは私たちも有志の数とそのグループを早急に増加させ、討議を重ねる過程で、納得できる候補をみずから見つける努力をしたいと思います。ともかく事を急ごうではありませんか。県政の浄化・刷新のために、亀井五選を阻止し、県政の流れをかえるために。

1982年8月1日 県政の浄化と刷新を志す県民の会

3. 有名でない方の「県民の会」

「県政の浄化と刷新を志す県民の会」は以後、8月24日火曜日、はかた会館で第2回目の県政を語る会を、9月15日、敬老の日、福岡市西市民センターで第3回目の県政懇談会を開いた。8月1日の会合での討議結果は、「清新な知事候補を早く！福岡県民のみなさんに訴えます」というアピールとして公表された。8月24日の会合では、清新な知事候補の早期擁立について民主諸団体へ申入れを行うことが申し合わせられ、「知事候補擁立に関するお願い」という文面にまとめて、9月2日に社会党、共産党、福岡県評などには代表が直接出向き申入れを行い、他の団体については適宜郵送された。そういう事柄に関する実務、参加者への連絡、諸文書の作成、会場の確保、会費の徴収などは、ほとんど奥田先生及び親しい方々の手で遂行されたように思う。

その間、後に有名な方の「県民の会」の代表幹事として獅子奮迅の活躍をされる岩元和秋先生、西井龍生先生などの御姿も、有名でない方の「県民の会」の当初からあった。ここで静かに貯えられた潜勢力が後に一気に爆発することになったといえよう。

第2回目の会合からは、「奥田八二に堵けた快男児」中西次男氏が常連となる。「奥田さん、お前、出ろよ。俺がかついで、絶対勝たしちやるよ。」奥田と中西は、同郷兵庫県出身、播磨弁というのだろうか、一種独特の関西弁で中西氏は奥田先生支援の熱弁を振うことになった。

奥田先生の仕事で、見逃せないものにいまひとつ、「総合地域政策懇話会」（現在事務局

担当常任幹事・木梨吉茂氏)がある。略称、地域懇の発足は1978年8月、亀井四選を阻止すべく坪沼氏が革新統一候補として擁立される前だったと記憶する。奥田先生は実質的にその発足以来今日に至るまで、地域懇の中心人物として活動を続けておられる。「住民生活の安定と創造的発展」を標語に、多方面の話題・問題をとりあげてきたこの会に集う人々が、やはり今度の知事選挙において従来の「社・共・労」型選挙の枠をこえた、より幅広い人々を結集する核となっていることは、疑問の余地のないところである。

地域懇にしろ、有名でない方の「県民の会」にしろ一般の人々がその必要性を感じつつも、容易には着手したり組織したりできないことを、奥田先生は良き協力者を得つつ、着実に実施してこられたのである。

その意味で、奥田先生は時務をわきまえた極めて責任観念の強い人であり、その時務に応える仕事を推進される過程において従来の「社・共・労」型をこえた新しい選挙態勢の芽を育てられたのだと思う。そう考えると、奥田新知事を生み出した要因——しかもその要因のなかでも相当に重要な地位を占めるのは、奥田八二その人だといわねばならない。

4. 大学教職組からみた奥田支援

プロフェッサー達の奥田支援という点、奥田先生が九大の出身であり、そこで学生部長、教養部長を歴任されただけに、組織的に九大ぐるみで知事選挙を戦ったかのような誤解を受けそうである。だが、正直なところ組織的に九大ぐるみで、というようなことは全くなかった。実体は奥田先生を知る各教職員が、個人の資格で一県民として、一市民として法の許す範囲で智恵を出しあい、協力し合ったということである。

年配の教授のなかには、奥田推薦に加わった社会党・共産党・革自連など以外の政党に属する国会議員や首長を友人に持つ人もある。そういう方々を通じて、奥田先生の真実の人物像が伝わったことは、奥田先生に亀井候補の陣営から注ぎせられた、いわゆる「アカ」攻撃を空振りに終らせるうえで大きい効果があったに違いないし、奥田支持が社会党・共産党支持者の枠をこえて拡大するのにも役立っていると考えられる。

告示後になると国家公務員である現役の教職員は運動に一層きびしく狭い制約を課せられる。だが、公務員を卒業されたOBの方々は、比較的自由に動ける。そういう方々は選挙カーに乗り、演説で真実の奥田八二像を弁じた。川口武彦先生、嶋崎讓代議士という知名のかつての九大教授が幾度も来福された。なかでも活躍が目覚しかった方に大川出身の英語学教授がおられるが、郷里のさまざまな集会で奥田先生支援を訴え続けられたと聞く。大川市の知事選投票率は前回に比し31%も上昇したというが、そのなかでこの老教授の熱弁によって高められた市民意識の反映した分が相当に大きいと考えられる。

現役の教職員が動けないとき、それを補って余りある働きを示したのは、その家族であった。種々の事務を援け、子供たちのPTA仲間を説得し、奥田支援の婦人集会に参加

し、様々の小規模集会で県政浄化が討議されたようである。県下全般で女性の投票率は77.9%で男性のそれを3.3%上廻ったが、この女性の関心の強さは大学においてもまた例外でなかった。

現役の教職員にできることで、最も効果があったのは、ベル・リン作戦と愛称されたものだったろう。ベルをリンと鳴らして、友人知人に電話をかけて、時候のあいさつやその他の用件のついでに県政浄化を訴える——それは公務員であっても一人の県民として当然の権利である。年賀状や暑中見舞のほかに、今年は春の声の便りで、各人大いに旧交を暖めた訳であるが、合わせて奥田先生を身近に知るものとしてデマ中傷に抗して真実の奥田先生の人柄を知って貰うためにも大いに役立ったと考えられる。

組合執行部としては、意識的に選挙に向けて組織的に動きだすことを手控えた。それというのも、ひとつには今回の選挙が保守か革新かというよりも清潔か腐敗かということが争点にならなければならないとの見通しのなかで、組合主導的に運動が展開されることの負の効果を考慮したからである。だが、ふたつめに、より重要なことは複雑な選挙関係法規の網のなかで、仮に違反に問われるが如きことでも生じた場合、奥田先生の出身母体として、世間に与えるマイナス・イメージの大きいことを考慮したからである。したがって、組合執行部は、インフォメーション・センターに徹した。組合員各自の求めに応じて集積した情報を提供するだけである。それでも各教職員の自発的動きに支えられて、最終的には目標だった2千人の支持確認を突破し、優に数百は上積みされたと思われる。

そして、ついに4月11日。奥田八二勝利にわれわれも微小ながら確実に貢献しえた実感できる日を迎えた。九大教養部教職員組合の委員長は、奥田教養部長時代前後に評議員として大学での執行部を構成された方、後2年で還暦を迎えられる後藤賢一教授である。その後藤委員長の下で、民社党支持者も公明党支持者もいるまさに県民党存在のわれわれの組合は、組合員の自発的な県政浄化の願いを、ゆるやかながらも調和を保って奥田勝利に結びつけ得たのである。組合の掲示板には今、後藤委員長の筆で「おくだ勝利万才」の文字が大きく躍んでいる。体質的に酒が呑めないにもかかわらず、後藤教授は、組合ニュースにこう書いている。「おくだ勝利万才。ついにわれわれの願いが叶いました。美酒を酌んで先生のご健闘を贅えたい気持です。本当によくやって下さいました。しかしここで気を弛めてはなりません。今後の課題は山積しています。」

(以上、全文私見。1983.4.19)。

※『社会問題月報』1983年5月号より転載。

【資 料】

選挙の年をかえりみて

福岡県知事 奥田 八二

どこかで歯止めを

1983年は各級すべての公職選挙が行われ、まさに政治の年でした。これまでの結果を概観しますと、選挙で国中が沸騰した割には、政治地図が塗りかえられたとはいい難く、基本的には従前同様の情勢がつづきそうです。

しかし、事態は決して不動だとはいえません。何だか行き詰っていくように感ずるので。先日上京したとき、夕方でしたが、羽田から半蔵門まで車で70分かかりました。有料道路も通常の道路もどちらも渋滞に次ぐ渋滞なのです。以前、新しく有料道路を作った時はぐっと車はさばけ、有料道路を作った目的は達せられたに違いないのに、今はこの様です。もう一本作ったらという発想もありますが、恐らくそれも間もなく渋滞するようになるのではないかと考えると、明らかに行き詰まりです。道路建設は道路行政が担ない、産業・生活がその道路を車で充満していきます。明らかに行政が受身になっていますが、行政が、いつでも産業・生活のニーズに後追的に応えればよいのかというと、私には、どこかで能動的に行政が産業・生活をコントロールすべき限界というものがあってよいと思えてなりません。大都市では道路が今や街路の美観さえ壊わしてしまい、おまけに動きがとれぬ車の渋滞です。横断歩道橋の乱設は人間無視ともいえましょう。歩道橋や市街地高速道を作れという政治の力と車の方を制限せよという政治の力があってよいはずですが、現実には後者は政治の力にはなっておりません。

米ソ両国の核装備の競争についても、いろいろ考えさせられます。核制限、核廃絶の声は決して小さくないのに、現実はこちらと逆行する政治の力が優勢です。車が渋滞し、コンクリートの高速道路や高層ビルの林立する都心に仮に核爆弾一個でも炸裂したとしたらどうなるか、誰でも考えることであるのに、皆他人ごとのように考えているらしく、核競争を進める政治勢力が選挙では勝つわけです。核武装論や軍備拡張論には、もちろんそれなりの理くつはある。それは街をコンクリートで固めて車をもっと早く通せというのと同様に、一つの理くつとして成りたつが、どちらも限度なくエスカレートする道です。

これに対して、どこかで歯止めをかける必要があるのではないか、変化がなく「膠着」しているように見える状況の中で、方向転換を与える力が今こそ必要なのではないか。83年

をふりかえって、私は、このように感ずるのです。

なるほど、転換が試みられていることも事実です。福祉や医療、補助金行政の分野にも一種の行き詰まり現象があることは確かであって、その分野に臨調・行革が鋭く嗅ぎつけて打開策を提示していますが、大事な点で見のがしが多いことも事実です。これは既存の政治勢力の範囲内の打開策ですから、人間が軽視される果てしない車社会や核競争、軍拡競争など大事な点で歯止めになってないのではないのでしょうか。

大胆な運動上の発想の転換が必要

では新しい政治勢力がなぜ優劣にならないのでしょうか。金がある選挙、金権選挙だから駄目だというだけでは答になりません。いわゆる革新の側に、今後はかなり大胆な運動上の発想の転換が必要ではないかと思うのです。

選挙は要するに票集めですが、投票する人は、ごくふつうの人が絶対多数だということは争う余地はありません。その絶対多数が何を基準に投票するかということを考えなければいけないでしょう。労働組合に依存し、組合幹部を候補に押し立てて一つの勢力をなしてきた社会党が伸び悩んで久しいことは周知の事実ですが、それは労働組合が発散させるインタレストに反応して投票する人がふえないということ、及び社会党が他のインタレストを発散させる工夫に欠けているということであらわしていると思います。時が流れ、人が変わり、情勢が遷^{うつ}るわけですから、投票者の関心を引くためには、それに応じたアピールをしないといけません。20年前に訴えたことと同様のことを今訴えても票にならないことが多いでしょう。しかし20年前と同じことをして相変わらず票になることもありましよう。その使い分けが必要だと思います。

私の知人のある業者の人がつい先日こういいました。非武装中立の旗を高々とかかげて票になるだろうか、その旗は降ろす必要はないが横において、今の選挙民がとびつくようなことを訴えないと勝てんですよと。バスツアーに連れて行ったり、葬式の花輪などがやっばり票になりますともいう。私はこの主張にも一理あるかなあと思います。

ふつうの人は誰でも日常的にきわめて多数のきずなで結ばれています。そのうちの最も卑近な、又は最も強いきずながその人の投票行動を誘うことになるでしょう。血縁、地縁、学友、同窓、同業者、顧客、同好サークル仲間などなど。党とか労働組合というきずなは、以前ほどの卑近さと強靱さを失ってきたといえましよう。バスツアーに連れて行くなどの手段は平素他のきずなで結ばれていなかったような人に対する新しいきずなといえますし、他のきずなよりも強い卑近なきずなの提供ともいえるでしょう。

妻の夫離れという現象もないわけではありませんが、夫婦のどちらかが他を引きつけて同じ候補に投票するという例は多いでしょう。この二人が同じ組合や党に所属していなく

でも、そうです。このように投票は必ずしも同じ思想、同じ考え方である必要はないのです。別の側面からいえば、投票への誘因は思想である必要はないわけです。思想とか考え方より、もっと強力な、身近なきずなが投票行動を決定するケースが多いといえるわけです。

投票行動をきめているものは

理性や理論や思想よりは、目先の利害、感情、情緒の方が、事実より強い投票誘因です。

そうだとすれば、票を集める運動は、選挙前であれ選挙中であれ、目先の利害、感情、情緒などの誘因に集中した方がよいでしょう。社会党が伸び悩む理由は、以上のような意味で、運動の向きがそうになってないからではないかと思うのです。

社会党には内部理論闘争ということがよくあるが、自民党にはそれがあまりありません。自民党の派閥はもっと現実的な利害のごときものではないでしょうか。自民党の強さは理論で争わないからであるとさえいえるほどです。

もちろん私は理論や思想を決して無視しているわけではありません。それを根底にしてこそ運動があると思います。しかし、それでもって今日の通常の大衆の投票を誘う競争をしても勝てるとは思えないのです。理論や思想は内なる力であって、日常の対人関係に、一般には役立たないのではないのでしょうか。その辺のことを、発想転換ということでも再考してみてもどうか、と提案します。

選挙で明けて選挙で暮れた一年でしたが、私が気づいた問題は、以上のような点でした。理論を磨き、思想を純化することと、議会制民主主義のもとにおいて選挙民の心をつかんで一つの政治勢力を形成することとは、おのずから局面が違ふということを知りたいのです。そのことをみんなで議論してみても下さることを望みます。(1983.12.1)

※『社会問題月報』1984年1月号より転載。